

山村における住民生活の構造

----宮城県七ヶ宿町横川地区の事例----

東北学院大学 佐久間政広

中山間地の過疎化は、いまや残された高齢者の死亡による人口の自然減という段階に至り、地域社会崩壊の危機が指摘されている。とはいえ、現在の山村において、農業が営まれ、人々の生活営為が継続されていることもまた事実である。そうした山村の農業経営および住民生活は、いかなる形態で、どのような社会関係のもとで維持されているのか。この点を明らかにすることは、山村のゆくすえを見定める上で不可欠の作業と考えられる。本報告は、過疎化高齢化の進展する山村の一事例を、とくに高齢者世帯の営む農業と生活を一つの軸として考察することにした。

本報告が対象とする横川地区の位置する宮城県七ヶ宿町の林野率は88.3%ではあるが、その平坦部には三つの集落を湖底に沈めて完成した七ヶ宿ダムが水をたたえ、耕地率は2.5%にとどまる。七ヶ宿町総世帯数746のうち高齢者単独世帯および高齢者夫婦世帯の占める割合が21.1%に達し、高齢化率は33.5%と宮城県の市町村のなかではもっとも高い。

横川地区世帯48戸のうち、64歳以下の世帯員のいない「高齢者世帯」型が13戸、44歳以下の世帯員のいない「向高齢者世帯」型が8戸と半数近くを占める。これらの型に属する各世帯において、他出子が戻って同居する確かな見込みはなく、また親世代が同居への強い働きかけをおこなっている様子はない。農業を営む世帯は33戸。若干の例外を除いて、すべて小規模な稲作を主とする兼業農家である。稲作作業は大部分が高齢の親世代によって担われ、作業の受委託は、親族関係にある農家間以外にはほとんどない。農外就労先は、七ヶ宿町内の建設業が多く、町外へ恒常的に通勤する職についている者は少ない。

高齢者世帯型に属する世帯の農業経営と消費生活に関しては、七ヶ宿町以外の地に定住する子世代家族によって少なからぬ部分が支えられている点が注目される。子家族の少なくとも一つは七ヶ宿町の近くに住み（長男家族であることが多い）、定期的に横川を訪れている。田を経営する5戸の春・秋の作業は、他出した長男および次男が、近隣の農家から農業用機械を町の協定料金で借りておこなっている。地区内の農家が無償で手助けすることはない。農作業において、「助けられる」ことはあっても「助ける」可能性のない高齢者世帯農家へは無償援助がみられず、家と家との互助原理の貫徹がネガティブな形で確認される。高齢者世帯の消費行動に関しても、食品をはじめ日常生活用品はすべて行商で間にあわせるが、それ以外の電化製品等は子家族が購入していることが多い。この子家族による支援に注目すれば、そこには multihabitation とでも名づけられる関係がみられると言えるかもしれない。

高齢者たちは、横川の地を離れて子家族との同居を積極的に望むことはなく、慣れ親しんだ自然環境と地域の間人関係に強い愛着を持つ。かれらの生活の支柱の一つである子家族との関係には、どのような性格づけを与えるべきか。また、横川の地域社会は、高齢者たちの生活にどうかかわっているのか。報告では、これらの問題を焦点として高齢者世帯の生活実態を考察し、山村における住民生活の構造の一例を紹介したい。